

# 観能の夕べ

(石川県立能楽堂)

令和三年七月二十四日(土曜日) 午後五時開演

## 狂言 長光(ながみつ)

長光とは備前の国の刀工の名前です。この人の作と伝える太刀を預かり、これを上方へ届がてら、坂東方の者が都見物に出ます。市には様々な店が並びます。田舎者を見つけてはいたずらを仕掛けるすっぱも混じります。さっそく坂東方の者が持つ太刀に目をつけ、太刀の緒を自分の腰にくくりつけて、自分の物だと言い張ります。騒ぎを聞きつけた所の目代が二人の間に割って入ります。坂東方の者から事情聴取する声ですっぱに筒抜けで、備前長光の国作りから地肌・焼きの具合まで、盗み聞きしたすっぱは同じことを答えます。気づいた坂東方の者が今度は小声で太刀の寸法を答えます。答えに窮したすっぱは帰ると言い出しますが、二人は許さず上着を脱がせて追い込みます。

## 能 草薙(くさなぎ)

比叡山の恵心僧都(ワキ)が熱田神宮に参籠し、七日間、最勝王経を講じています。そこへ草を刈り花を売る夫婦(前シテ・前ツレ)が今日も訪れ、自分たちはこの社で国家を守護する身であるが、五穀成就と人寿円長は最勝王経の功德によると、恵心僧都の講経を称えます。夫は草薙の剣を守る神、妻は延命の仙女と名乗り、講経結願の夜、姿を見せることを約束して消え失せます(中入)。結願の日、鳴動する社殿の中から神々出現します。衆生の息災延命を見守るといふ神々は、女神は熱田の源太夫の娘、橘姫の靈魂(後ツレ)、男神は神剣を守る日本武尊、すなわち素盞鳴の神靈(後シテ)を名乗ります。その昔、日本武尊は東国の賊を退治する勅命を受け、伊勢神宮を参拝して熱田の神剣を授かりました。これを持ち東国へ向かう途中、かつて出雲の国で素盞鳴尊に退治された大蛇が剣を取り返そうとして道を塞ぎますが、尊は駆け破って通ります。駿河の国では枯れ野の草に火を放たれますが、尊は剣を抜いて草を薙ぎ払い、焼き返して敵を滅ぼしました。草薙の剣は熱田神宮に納まり、その神徳は久しく国家を守護し、最勝王経のお陰で人々も息災でいられるということです。

(西村 聡)

前シテ(花売男) 厚板又は団熨斗目 白大口 水衣 腰帯 剣 扇  
後シテ(日本武尊) 面(怪土) 黒頭 唐冠 厚板 半切 法被 腰帯 剣 扇

(七時頃終了予定)